

<翻 訳>

アウグスティヌス『マニ教徒を反駁する創世記注解』(2)⁽¹⁾

菊 地 伸 二

第2巻

第1章 創世記第2章と第3章の朗読

1. 七日間を数え上げその説明をした後に一種の結論が挿入されている。それまで述べられたことは創世記のわずかな部分でしかないが、天地の創造の書と呼ばれている。この世界の始まりから終わりまでが、いわば短い一種のイメージでこの七日間のうちにたとえられているので、そのように言ってもよいだろう。続いて人について、より入念に叙述がなされはじめる⁽²⁾。それらの叙述はすべて明確にではなく、比喩的な仕方で展開されていくが、それによって真理を探究する者の精神を駆り立てて、肉的な業から霊的な業へと呼び出すのである。以下次のような内容となる⁽³⁾。

これが天地創造の書である。神が天地を造ったその日が造られたとき、地上には野の緑色のものはまだ全くなく、野のあらゆる食べものもなかった。まだ神が地上に雨を降らせず、地を耕す人もいなかったからである。しかし泉が地からわき出て、土の面をすべて潤していた。そしてそれから神は土の泥から人を造り、その顔に命の息を吹き入れた。そして人は生きる者となった。それから神はエデンの東に樂園を造り、神が造った人をそこにおいた。神はまた地から、見るに美しく食べるによいすべての木を生えさせ、樂園の中央に命の木と善悪の知識の木を植えた。一本の川がエデンから流れ樂園を潤した。そこからそれは四つの部分に分れた。第一の名前はピション、これは金を産出するハビラ地方全域を巡っており、その地の金は最高であり、ダイヤモンドやエメラルドもその地にはあった。第二の川の名前はギホン、エチオピア全域を巡っていた。第三の川はチグリス、アッシリアの方に流れていた。第四の川はユーフラテスと呼ばれていた。主なる神はお造りになった人を連れて樂園におき、そこで働かせ樂園を守らせた。

そして主なる神はアダムに命じて言った。「樂園にあるすべての木からあなたは食べも

のとして食べなさい。しかし善悪の知識の木に関しては、あなたはそれから食べてはいけない。というのはあなたがそれから食べた日にはあなたは死ぬことになるから。」また主なる神は言った。「人がひとりでいるのはよくない。この人に似た助け手を造ろう。」神があらゆる種類の家畜、あらゆる種類の野の獣、天の下を飛ぶあらゆる種類の鳥を造り、アダムのところへ連れていき、彼がどのように呼ぶかを見た。そしてアダムがそれぞれ生き物を呼ぶとその名前となった。そしてこの後、アダムはすべての家畜、すべての天の鳥、すべての野の獣の名を呼び、アダムがそれを呼んだ名前が今日までその名前となっている。しかしアダム自身にはまだ彼に似た助け手がいなかった。神はアダムの中に眠りを送り込んだ。彼が眠ると神はアダムから肋骨を一本取り、その場所を肉で満たし、アダムから取った肋骨から女を造った。そしてその女をアダムのところへ連れていき、何と呼ぶかを見た。するとアダムは言った。「おおこれぞ私の骨からの骨、私の肉からの肉。これぞ女と呼ばれるだろう。男から取られたものだから。そしてこの人こそ私の助け手となるだろう。」こうして人は父と母のところを後にして妻と結ばれ、二人は一つの肉となる。アダムとその女は二人とも裸であったが、当惑しなかった。

2. 蛇は主なる神が造った地上のすべての獣のうちでもっとも賢かった。そして蛇は女に言った。「どうして神はあなたが楽園にあるすべての木から食べるなど言ったのか。」そこで女は蛇に言った。「楽園のすべての木から私たちは食べるけれども、楽園の中央にある木の実から、私たちが食べて死んだりしないように触れるなど神はおっしゃった」と。すると蛇は女に言った。「あなたは死んだりしない。神はあなたがそれから食べた日に、あなたの目が開かれ、神々のように善悪を知るようになることをご存じなのである。」

女が見るとその木は食べるによく、目が見て知るのによかった。そこで彼女は木から実を取って食べ、男に与えた。そこでアダムは受け取り食べた。彼らの目は開け、自分たちが裸であることを知った。そしてイチジクの葉を自分たちのためにとってエプロンとしてつけた。アダムと女は主が夕方頃楽園を歩いている音を聞いたとき、楽園の中央にある木の方に、主なる神の顔の前から隠れた。そこで主なる神はアダムを呼び彼に言った。「アダムよ、どこにいる。」彼は言った。「主よ、楽園においてあなたの声を聞き怖くなり隠れました。私は裸でしたから。」そこで主なる神は言った。「誰がお前が裸だと告げたのだ。お前にそれだけは食べてはいけないと私が言った木から食べたのだな。」アダムは言った。「あなたが私に与えてくれた女が食べるようにしてくれたので食べました。」そこで神は女に言った。「どうしてこんなことをしたのだ。」女は言った。「蛇が私を誘ったので食べました。」そこで主なる神は蛇に言った。「お前はこんなことをしたのですべての家畜、すべての種の獣から呪われる。お前は胸と腹で這い、生きている間ずっと土を食べよ。そして

お前と女の間、お前の子孫と女の子孫の間に敵意をおく。彼女はお前の頭を見、お前はそ
の踵を見る。」また神は女に言った。「お前の悲しみと溜息を何倍にも増やす。お前は子を
苦しんで生む。そしてお前は男の方に向き、彼がお前を支配するだろう。」それから神は
アダムに言った。「お前は女の声聞き、私がそれだけは食べるなど命じた木から食べた
ので、土はすべてのものの中で呪われるものとなった。生きている間ずっと悲しみ呻きな
がら食べなくてはならない。土はそこに茨とあざみを生えさせ、野の食べものを食べる。
お前は顔に汗してパンを食べる。土に帰るときまで。お前がそこから取られた土に。土に
すぎないお前は土に帰るのである。」

それからアダムは妻の名前を命とした。何故なら彼女はすべての生きるものの母である
から。そして主なる神はアダムと女に皮の衣を作って着せた。そして言った。「見よ、ア
ダムは我々のひとりのようになった。善悪を知ることの知識については。今やアダムが命
の木に手をのばして、そこから取って食べて永遠に生きないようにしよう。」主なる神は
甘美の楽園から、彼がそこから取られた地で働くために解雇された。そして楽園から外へ
追いやられ、快楽の楽園の反対におかれた。そして神は命の木の道を守るために、ケルビ
ムと回る炎の剣をおいた。

- (1) 今回は『マニ教徒を反駁する創世紀注解』の後半部分、すなわち第2巻を訳出する。尚第1
巻の訳については、『柳城女子短期大学研究紀要』第16号(1995年3月)、pp.205~233を参
照のこと。
- (2) 今日の旧約学では『創世紀』1章1節~2章4節aまでは祭司資料、2章4節b~3章の終わ
りまではヤハウエスト資料として見做されているが、アウグスティヌスはこれらをひと続き
のものとして考えていたので、ここにさまざまな問題が生ずることになる。
- (3) 基本的にアウグスティヌスの原文を重視し、必ずしも新共同訳には従わなかった。

第2章 創世紀は常に文字どおりに説明できるわけではない

3. もし彼らがこうした言葉の秘義を非難したり批判したりせず、問いながら敬意をは
らって探求をすることを選ぶならば、確かにマニ教徒ではなくなる。むしろ求める者には
与えられ、問う者は見いだし、叩く者には開かれる(マタ7, 7)。というのは敬虔な細
心さで問う者は惨めで不敬虔な人よりもこの話において多くの疑問を生むからである。し
かし両者にはこのような違いがある。前者は聞いて見いだすが、後者は営むが結局求めて
いるものを見いださない。それ故この話はすべてまず歴史的に論じられるべきで、次いで
預言的に、ということになる。為されたことは歴史的に語られ、将来のことは預言的に告
知される。もちろんある人が言われていることを、文字に従って、つまり文字が響くよう

に受け取り、しかも非難を避けられ、カトリックの信仰にすべて一致して述べられるならば、その人に対して敵意を持たないどころかむしろ彼を指導的で、非常に称賛すべき理解者と見做すのは当然である。しかしもし書かれていることが比喩的で謎めいた仕方であると信ずる以外には、敬虔にそして神に相応しく理解されるような道が与えられないならば、私たちはそれによって旧約の書物の非常に多くの謎が解決された、あの使徒的な権威を有しており、私たちに求め、尋ね、叩くように励ますお方の助けによって、私たちがとってきたのと同じ方法を採用することにしよう。カトリックの信仰に従って、歴史に属するものであれ、預言に属するものであれ、事柄のすべての比喩を説明しよう。そして主が私たちを通してであれ他人を通してであれ、啓示されることをお決めになったことをよりよくより入念に調べて、偏見を抱かずに行なおう。

第3章 野の緑色のものが意味するもの

4. 「それ故神が天地を造ったその日が造られた。そして地上には野の緑色のものはまだ全くなり、野のあらゆる食べものもなかった。」上で七日間は数えられ、今神が天地、そして野の緑色のものすべてと野のあらゆる食べものを造ったのが一日と言われている。この日という名によってすべての時が意味されていると理解するのがよい。というのは神はすべての時をすべての時間的な被造物と同時に造ったからであり、その可視的な被造物は天地という名によって表示されているからである。しかし天と地が造られた日と言われた後に、さらに野のすべての緑色のもの、食べものと付加されているので、私たちは一つの問いへと動かされるべきである。というのも「はじめに神は天地を造った」と言われたとき、すべての野の緑色のものと食べものは造られたとは言われていないからである。というのも明らかに三日目にすべての野の緑色のものと食べものが造られたことを読むからである。しかし「はじめに神は天地を造った」と言われていることは、七日間のどの日にも属していない。というのはその時点ですべてのものがそこから造られた質料が天地という名で呼ばれていたからである。あるいは「はじめに神は天地を造った」というとき、天地という名ですべての被造物が前もって言われ、その後個々に、日の秩序に従って、相応しい仕方で、第一巻で我々が述べた預言的な仕方で神の作品をひとつひとつ説明したのである。

それ故天地が言われたのに、野の緑色のものと食べものを付加するのはどういうわけか。一方で天や地や海の中のかくも多くの被造物について何も語っていないのに。野の緑色のものは魂のように不可視的な被造物と解することが望ましいのか。実際、聖書の比喩では、

野は世界と呼ばれるのが常である。事実主ご自身も語る。「この野は世界である」(マタ 13, 38)。主はよい種に毒麦が混ざった喩えを説明している。それ故野の緑色のものは生命の力の故に霊的な不可視的な被造物を示し、そして確かに食べものという名によって我々は命を示すものとしてこのように解釈するのはよいことである。

5. 次いでそれらが地上にまだなかったと加えられているのは、魂がまだ罪を犯していなかったと解されるべきである。というのは地上の欲求によって泥まみれになることが、まさしく地上に生まれる、あるいは地上にあると言われるから。従って「まだ神は地上に雨を降らせなかった」と付加されている。

第4章 「まだ地上に雨を降らせなかった」(5節) とはどういうことか

さて、神は野の緑色のものを造り地上に雨を降らせた。つまり魂をその言葉によって再び緑色にした⁽¹⁾。しかし神は魂を雲から、つまり預言や使徒の書から潤す。それらがいみじくも雲と言われるのは、それらの言葉が空気を打って響いて通り過ぎたとき、比喩の曖昧さが加わって霧のように立ち込めると雲のようになるからである。勉強して絞り出されると、よく理解した者にはいわば真理の雨のように注がれる。

しかし魂が罪を犯す前は決してそうではなかった。つまり野の緑色のものが地上にある前は。「何故なら神は地上に雨を降らせなかった。そこを耕す人もいなかったから」である。というのはすでに述べられたそれらの雲からの雨は地上で働く人にこそ必要であるから。しかし罪の後、人は地上で働きはじめその雲を必要としはじめた。しかし罪の前は、その名によって不可視的な被造物が意味されていると言ったが、神が野の緑色のものと食べものを造ったとき、神はその知性に語りながらそれらを内的な泉によって潤していた。いわば上述の雲から雨を受け取るように外的な言葉を受けていたのではなく、その泉から、つまりその内奥にどどまる真理から満たしていたのである。

(1) revirescere には再び緑色にする、再び活気づけるという意味がある。

第5章 地を潤す泉の比喩的な解釈、傲慢の意味するところ

6. 聖書は言う。「というのは泉は地からわき出て地の面をすべて潤っていた」と。地からというときのその地については、「あなたは私の望みであり、生きるものの地に私の

分け前がある」(詩 141, 6)と言われている。魂がそのような泉に潤されていたとき、その内奥は傲慢によって突き出ていなかった。というのは「人間の傲慢の始まりは、神から背くことであるから」(シラ 10, 14)。そして傲慢を通して外に膨れ上がり、内的な泉で潤されはじめなくなるとき、これらの預言者の言葉によって、馬鹿にされて言われるのは当然である。すなわち「地と灰は何を誇るのか。その命の内奥を突き出したからか」(シラ 10, 9~10)。というのも傲慢とは、良心の秘義を捨てて、自らと異なるものに外的な仕方では思われたがることに他ならないから。従って地上で働く者は雲から雨を必要とする。すなわち人の言葉から教えを必要とする。このようにして彼は渇きから緑色になり、再び野の緑色となる。

しかしこれらの雲から喜んで真理の雨を受けることができればよいのだが。実際その故に我々の主は我々の雲という肉を受けることを決め、聖なる福音の雨をきわめて寛大に注いだのである。彼はもし誰でもこの水から飲んだら、その内的な泉に帰り外的に雨を求めないと約束された。すなわち言う。「彼の内には永遠の命に流れていく水の泉が生ずる」(ヨハ 4, 14)。私は信ずる。罪の前にはこの泉は地からわき出ていて地のすべての面を潤していた。というのはそれは内的なものであり雲の助けを望まなかったから。

というのは「神はまだ地上に雨を降らせなかった。そこで働く人がいなかった」からである。事実「神はまだ地上に雨を降らせなかった」と言ったとき、どうして雨を降らせなかったのか、その理由も付け加えて「そこで働く人がいなかったから」としている。ところで人が地上で働きはじめたのは、罪の後、楽園で享受していた至福の生から解雇されたときではないのか。事実次のように言われている。「主なる神は喜びの楽園から彼を解雇した。彼がそれから取られた地で働くために。」それについてはしかるべきところで探求しよう⁽¹⁾。

私がそのように言ったのは、ただ地上で働く人にとって、すなわち罪の渇きの中におかれた人にとって、人の言葉を通して神の教えが必要であること——あたかも雲から注ぐ雨のように——を理解するためである。しかしそのような知識は崩壊するであろう。何故なら我々は今は雲の中に食糧を探すようにおぼろげに見ているが、かのとき、我々の地の全表面がわき出る水の内的な泉で潤されるときは面と向かう(1 コリ 13, 8)からである。何故ならもし我々が「泉は地からわき出て地のすべての面を潤していた」と言われているこの言葉を、この可視的な水から生ずる泉として理解しようとするならば、世界中を探しても流れ続けるそんなに多くの泉や川、そしてすべての地の表面を潤しているものだけが渇いているそのような泉はありそうもないからである。

(1) 第 22 章 34 節。

第6章 不可視的なものを意味する言葉

7. それ故これらのいくつかの言葉によって、魂の罪の前の被造物全体が提示される。というのは天地という名によって可視的な被造物全体が意味される。そして日という名で、時間全体が、野の緑色のものと野の食べものによって不可視的な被造物が、そして地からわき出て地のすべての面を潤す泉という名で、罪の前に魂を満たしていた真理の溢れ出る水が意味される。しかしその名によって時間全体を意味していると言ったこの日は、我々に単に可視的なものばかりではなく、不可視的な被造物も時間を知覚できることを教えてくれる。これが魂について我々に明白にされたことである。

魂の愛情のかくも大きな変化、つまりそれが惨めになって落ちてから、再び至福へ帰るまでの準備を通して、魂は時間によって変化することができることを信ずるのである。従って神が天地を造った日が造られたと言うとき、ただ可視的な被造物が意味されたのではなく、されに野の緑色のもの、野の食べものという名によって不可視的な被造物、いわば魂がその力と生命の故に意味されたのである。

そして「神が天地を造ったその日が造られたとき、野のすべての緑色のものと野の食べもの」と言われたように、我々は単に可視的なものだけではなく、不可視的なものもまたその可変性の故に時間に属することを理解するのである。というのは神のみが不可変であり時間に先立つものであるから。

第7章 泥はどんな神秘をもっているのか

8. 我々は可視的及び不可視的な全被造物、そして不可視的な被造物に対する神的な泉という普遍的な恵みについて言及したので、特に人について言及されていることを見ることにしよう。それはとりわけ我々に関わってくるからである。まず神が人を土の泥から造ったということについては、その泥とはどのようなものであるとか、泥という名でどんな質料が意味されているかといった疑問が生じるのが常である。しかし旧約のあの敵たちは、すべてを肉的に見てそれ故誤るのであるが、神が人を泥から造ったということについても噛みついて非難するのが常である。すなわち彼らは言う。「どうして神は人を泥から造ったのか。神は人を造る際にもっとよい天的な質料を欠いていたのか。その結果地上的な汚れからあんなにもろく死を免れないものとして造ったのか」と。

まず彼らは地とか水が聖書でどれほど多くの意味をもっているかを理解していない。というのは泥は地と水の混ざったものであるから。また我々が人の体が腐敗し、もろくなり、

死ぬものとなりはじめたのは、罪の後だから。というのは彼らは我々の体のうちに我々が断罪によって受けることになった死性だけを恐れているから。しかしたとえ神が人をこの地の泥から造ったとしても、もし人が神の命令を守り罪を犯すことを望まなかったならば、腐敗に属しないようなそのような体を造ることは神にとって驚くことでも難しいことでもあるだろうか。というのは我々が天そのものの美を無から、あるいは無形質料から造ったというとき、それは我々が全能の製作者を信じているからであるが、もし身体がどのような種の泥から造られたとしても、全能の製作者によってそのようなになったのであれば、罪の前にそれが人に何ら困難や何ら不足を与えたり何ら腐敗によって朽ちることがなかったとしても不思議であろうか。

9. 従ってもしここで身体の形成について言われているとするならば、神が人の体をどこから造ったかと尋ねてみても無駄であろう。実際我々の幾人かはそのように理解しているらしい。すなわち彼らは「神が人を土の泥から造った」と言われた後、加えて「その像と類似に」と言わなかったのはそこでは身体の形成について言われているからであると主張する。他方「神は人を神の像と類似に造った」と言われるときは内なる人が意味されていたのである。しかしたとえここでも我々が人を身体と魂から造ったと理解するならば、ここではある新しい業の始まりではなく、上で短く言われたことのより入念な再論が展開されていることになる。それ故私が言ったように、もし我々がここで人が身体と魂とから造られたと解するならば、その混合が泥という名で受け取られるのは馬鹿げたことではない。というのは水と土が混ざって泥となると、水は土を集め、膠着させ、内包するように、魂は身体という質料を活性化して調和的な一性を造り、それが崩れることを許容しないからである。

第 8 章 息を吹きかけること。人間の霊は聖書でどう言われているか

10. ところで「神は彼に命の霊を吹きかけ、人は生きる者となった」と書かれているが、もしこの時点まで身体だけしか存在していないならば、我々はここで魂が身体と結びあわさったと解するべきである。

魂はすでに造られたが、あたかも神の口のうちに、つまりその真理または知恵のうちにあったのである。しかしそれは吹きかけられたとき、あたかも場所的に分離したようにそこから離れたのではない。何故なら神は場所に限定されず至るところに現在するからである。

あるいは神が命の霊を身体に吹きかけたとき魂は造られたのか。その吹きかけが神の働きそのものを意味し、それによって神は人の魂をその力の霊によって造ったのである。

しかしもし造られたその人がすでに身体と魂だったならば、この吹きかけによって魂に感覚が付け加えられそのとき人は生きる者になったのか。つまりその吹きかけで生きる者になったのではなく、それは生きる者に作用したのであると。しかし生きる者となった人を霊的なものとしてではなく、まだ肉的なものと解するべきである¹¹⁾。何故なら彼は楽園において、つまり至福の生において完全性の命令を受けて神の言葉によって完成されたとき霊的になったのであるから。従って神の命令から背き、罪を犯し、楽園から解雇された後、肉적である状態に留まった。そして墮罪後、彼から生まれた我々はまず肉的なものとして生きるのである。我々が霊的なアダム、すなわち罪を犯さない我々の主イエス・キリストに到達するまでは。そして彼によって再創造され、生かされ、楽園で再生される。ここでは泥棒がこの生を終えた日に彼と共にある(ルカ 23, 43)。というのは使徒は言う。「霊的なものは最初ではなく、肉的なものが最初である。最初のアダムは生きるものとなった。最後のアダムは命を与える霊となった」(1 コリ 15, 44~46)。

11. それ故我々はこの箇所を、つまり「神が命の息を彼に吹きかけた。そして彼は生きる者となった」という言葉を、神の本性のいわば部分が人の魂になったと信じたり、神の本性が可變的なものであると強制されるように解するべきではない。真理がマニ教徒たちを大いに圧迫するのはこの誤りにおいてである。というのは傲慢がすべての異端者の母であるように、彼らはあえて魂は神の本性であると言ったからである。そして我々が彼らに言うとき、彼らは我々によって圧迫されるのである。すなわち神の本性は誤り、悲惨であり、悪徳の汚れで腐敗し、罪を犯す。あるいはあなたがたが言うように、敵対する本性、そして神の本性について信ずることが許されないような他のそのようなものの汚れによって汚れている。というのは他のところで聖書ははっきりと魂は全能の神によって造られ、従ってそれは神の一部でもなければ神の本性でもないと記しており、預言者は「すべての人々の霊を造った方がすべてを造った」(詩 32, 15)と言う。また他のところで「人の霊を造った方は彼のうちにある」(ゼカ 12, 1)と言われている。従って人の霊が造られたことはこれらの証言によって明白に承認される。他方聖書ではそれによって動物から異なり、自然の法によってそれらを支配している魂の理性的な能力が人の霊と言われている。それについて使徒は「彼のうちにある人の霊を除いて人に属するものを誰も知らない」(1 コリ 2, 11)と言っている。

もしこれらの証言によって魂が造られたことが承認されないならば、人の霊は造られたのではないと言い、それは神の本性であると考え、神の息が吹きかけられたときに神の一

部が霊になったと言う人には事欠かない。同様にして健全な教えはこのことを拒絶する。というのは人の霊は時として誤り、時として賢く考え、自らが可變的であることを主張している。これを神の本性と信ずることは全く許されない。人の魂があれほどの悪徳と悲惨の荷の下でなおも呻きながら、自らが神と等しいということほどに大きな傲慢の徴はありえないのである。

(1) パウロに由来する言葉である（1 コリ 2， 3）。

第 9 章 楽園の喜びのアレゴリー的な意味

12. さて今や人の至福そのものを見ることにしよう。それは楽園という名によって意味される。というのは人は普通茂みの中で喜ばしい休息をとるから。そして光が我々の感覚のために東から生じ、我々の体よりも気高くすぐれた天が昇る。このことからこれらの言葉もまた比喩的に至福の生を含んでいる霊的な喜びを表現し、庭は東に設置される。他方我々の霊的な喜びは至福の魂が知識を見るのに美しく朽ちず、食べるのによいあらゆる木によって意味されている。というのは主は「朽ちない食べ物のために働け」（ヨハ 6， 27）と言うから。魂の食べ物であるすべてのアイデアとはそういうものである。知恵の光はエデンの東の方に、不可視的で可知的な喜びのうちにある。何故ならもしヘブライ語からラテン語に訳されれば、この言葉によって喜び、快樂、祝宴が意味されると言われているから。しかし訳がないならば、特定の場所より比喩的な表現を意味しているように思われる。我々は地が産み出したすべての木をすべての霊的な喜びととる。というのはそれは地上の欲望に巻き込まれずに地の上に生じるからである。

他方楽園の中央に植えられた命の木とは、それによって魂が自らが事物の中位のところに秩序づけられていることを理解すべき知恵を意味している。魂はすべての物体的な本性は自分に従属していても、自らの上に神の本性が存することを知っており、そして右に傾いて自分でないものを威張ったり、左に傾いて自分であるところのものに無関心になって軽んじたりしない。それこそ楽園の中央に植えられた命の木である。他方善悪の知識の木によって魂の中庸さとその秩序づけられた完全性を意味している。何故ならその木も楽園の中央に植えられたから。従ってそれは善悪の識別の木と言われる。というのは魂は前にあるもの、つまり神に向かって伸ばし、後のもの、つまり物体的な快樂を忘れるべきであるから。しかしもし魂が神を捨てて自分自身に向かい、あたかも神なしに自らの力で享受しようとしたら、すべての罪のはじめである傲慢が膨れ上がる。罰がこの罪に従うとき、捨てられた善とそこに陥った悪との違いとを経験によって学ぶだろう。これが善悪の識別

の木の実から味わった時のことである。従って楽園にあるすべての木から食べてよいが、しかし善悪の知識の木からだけはだめであると命じられたのである。すなわちそれを享受すべきではなかった。その本性の秩序づけられた完全性が食べることによって侵され壊されたのであった。

第10章 四つの川が意味するもの

13. エデンから出てきた川、すなわち喜び、快樂、祝宴から出てきた川、その川は『詩編』で預言者によって言われている。「あなたは彼らにあなたの喜びの流れから飲ませる」(35, 9)。というのはエデンはラテン語では喜びと言われる。川は四つの部分に分れる。それは四つの徳を意味する。賢慮、剛毅、節制、正義である。ピシオンはガンジス、ギホンはナイルと呼ばれ預言者エレミヤにおいても見られる(エレ2, 18)。今は他の名前で呼ばれている。今はティベル川と言われているが、昔はアルブラと言われていた。他方チグリスとユーフラテス川は今もなお同じ名前を保っており、今述べたようにその名前によって霊的な徳が意味されている。もし誰かがヘブライ語かシリア語を考えるならば、その名前の訳はこのことを示している。エルサレムは可視的で地上の場所であるが、霊的には平和の都市を意味しているようにである。

シオンもまた地上の山であるが観想を意味しており、この名前はしばし霊的なものを理解するために聖書のアレゴリーにおいて用いられる。そして主が言うように、エルサレムからエリコに下ってきて途中で傷つき泥棒によって傷を負わされ半殺しにあった人の話については、これらの土地は歴史的には地上に見いだされるものであるが、霊的に理解するように強いられるのである。

14. それ故賢慮はあらゆる人の口から疎遠な真理の観想を意味している。それは言葉を絶しているからである。たとえあなたがそれを表現しようと苦労しても生みださないだろう。使徒もそのような観想において人が語ることを許されない言葉を絶した言葉を聞いたのである。この賢慮は金、ダイヤモンド、エメラルドを持った地を取り囲んでいる。すなわちそれは最良の金が浄火されてあらゆる地上の汚れから輝くような生きることについての教えを有しており、またダイヤモンドの輝きが夜に打ち勝つように、どんな虚偽も打ち勝つことのない真理を有している。それはその渴くことのない力の故に、エメラルドの緑によって意味される永遠の命を有している。非常に暑く燃えるようなエチオピアを囲む川は剛毅、行為に熱しやすく活気ある様を示している。第三の川、チグリス川はアッシリア

の方に流れているが、賢慮の相談に大いに反抗する欲望に抵抗する節制を意味している。こういうわけでアッシリアとは一般に聖書では敵の役にされている。四番目の川はどちらの方向に流れているとか、どの地を囲んでいるとか言われていない。というのは正義は魂のあらゆる部分に属しているから。というのはこれら三つのものがそれによって一つに結びあわさって調和を保つ魂の秩序でありバランスであるから。第一は賢慮、第二は剛毅、第三は節制、そして正義はこの全体の統一と秩序のうちに存する。

第 11 章 楽園における人の仕事：助け手として造られた女

15. 人が楽園で働き守るようにたてられたこと、その称賛すべき仕事は大変なものではなかった。というのも楽園での仕事と罪の後、罰せられた後の地上でのそれとは異なるから。しかし「そして守るように」と加えられていることから、その仕事がどのようなものかが意味されている。何故なら死が存しない至福の生の静けさにおいては、すべての仕事はあなたが保っているものを守ることだけだから。すでに我々が上で述べたその命令も彼は受け取っている。その命令はひとりの人に語っていないかのような結びとなっている。すなわち「あなたがたが食べた日に死ぬであろう」と聖書は語る。つまりどのように女が造られたかの説明が始まる。そして男の助けとして霊的な結合によって霊的な子孫、つまり神的な称賛というよい働きを産み出すために造られたのである。彼が支配し彼女が従う者として。彼は知恵によって支配され女は男によって支配される。というのはキリストは男の頭であり男は女の頭であるから（1 コリ 11, 3）。従って「人がひとりであるのはよくない」と言われる。このようなことがなお生じたのは、身体が従属の位置を占める故に魂が身体を支配するためだけではなく、その助け手を通して身体に命ずるところの男性的な理性が自らにその動物的な部分に従属させるためである。このことの例としてその事柄の秩序が男に従うところの女が造られたのである。つまり二人の人のうちにより明らかに現われたこと、つまり男と女のうちに現われたことがまたひとりの人のうちでも考えられるためである。

つまりそれを通して我々が身体の各部分に働きかける魂の欲求をいわば男性的な理性である内なる精神に従属させるために、そして正しい法によって男が女を支配し、女に男を支配するのを許すべきでないように——実際そのことが生じると家は逆転して惨めになるが——その助け手に限度をおくためにである。

16. それ故神がまず人にそれが家畜、そしてすべての非理性的な生き物よりどれほどす

ぐれているかを示した。それはすべての生き物が彼のところに連れてこられ、彼がそれを見て呼びそれらに名前を与えられていることによって意味されている。このことから理性によって人は家畜よりも優れていると思われる。というのはそれについて判断する理性がそれらを区別し名前で識別するからである。

もっともこの考えはわかりやすい。人はすぐに自らが家畜よりも優れていると理解するから。しかし次の考えはわかりにくい。つまり自分自身のうちで支配している理性的な部分と支配されている動物的部分が別のものであることを理解することは。

第12章 アダムは眠リエバと一つになる

彼はこれらのことを隠れた知恵によって見るので、この隠れた知恵は神が人のために女を造ったときアダムを送り込んだ眠りという名で意味されていると思われる。これを見るには身体的な目は必要ではなく、人はこれらの可視的なものが知識の内奥に進んでいく(つまりいわば眠り込むことである)につれ、それはよりよくはっきりと見えるからである。我々のうちで理性によって支配することと理性に従うことが別であることを理解する認識、それはいわば男の肋骨からの女の誕生によって示される。何故ならそれは彼らの結合を意味すると思われるから。次いで誰であれ、自らのこの部分を正しく支配して、いわば自らの内に結合が生じて、肉が霊に抗して欲求せず、霊に従属することによって肉であることをやめるためには完全な知恵が必要である。そうした観想とは内的な隠れたものであり、身体のあるあらゆる感覚からもっとも遠いものであり、それもまた眠りという名で理解される。何故なら神の知恵であるキリストが男の頭であるとき完全な意味で男は女の頭であるから。

17. まさしく神がその肋骨の場所を肉で満たしたのはこの言葉によって各人が自らの魂を愛し、それによって魂を軽視することほど無感覚にならないように愛情が意味されるためである。つまり各人は統括している対象を愛している。事実肉的な欲求を表わすためにここで肉と言われているのではなく、むしろ預言者が言うように、民が石の心から取り除かれ肉の心が与えられるというような仕方である(エゼ11, 19)。

何故なら使徒も「石の板にではなく心の肉の板の上に」(2コリ3, 3)と言うからである。元々の表現と今我々が扱っているような比喩的な表現とは別のものである。従って歴史的には可視的な女がまず主なる神によって男の身体から造られたとはいえ、このことは理由なくして行なわれたわけではなくある秘義を告げているのである。実際女が造られ

たとき泥はなかったのであろうか。あるいはもし主が望んだならば、人が眠ることなく、しかも痛みなしに肋骨をとることはできなかったのであろうか。

それ故これらのことが比喩的に言われたか、また比喩的になされたにせよ、目的なくしてそれらは言われたわけでもなされたわけでもない。それらは我々の弱さが試みられたようであれ、あるいは健全な信仰に従って解釈され理解されるべくより優れた仕方であれ明らかに神秘であり秘義である。

第 13 章 人における霊的な結婚

18. それ故男は女を、ちょうど強い者が劣った者を呼ぶように呼んで言った。「おおこれぞ私の骨からの骨、私の肉からの肉」と。「骨からの骨」、恐らくそれは剛毅の故であり、「肉からの肉」とは節制の故である。何故ならこれらの二つの徳は理性的な賢慮が支配している魂の劣った部分に属していると教えられているから。他方「これぞ女と呼ばれるだろう。男から取られたものだから」と言われていることはその名称の起源及び解釈はラテン語には見られない。というのも女という名詞が男という名詞に対して何ら類似性を有していることが見いだされないから。しかしヘブライ語法では次のように言われているように聞こえるらしい。つまり「これぞ virago と呼ばれよう。vir から取られたものだから」と。実際 virago または virgo⁽¹⁾ ならばむしろ vir という名詞とある類似性を有している。しかし女 (mulier) はそうした類似性を持っていないが、それは私が言ったように言語の違いによるものである。

19. 他方「人は父と母のところを後にして妻と結ばれ、二人は一つの肉となる」と加えられていることは、一般に人類においてこのことが起っていると理解する以外に歴史的にどのように解してよいかわからない。しかしこれらすべては預言であり、それについて使徒は思い起こして語る。「こういうわけで人は父と母のところを後にして妻と結ばれ、二人は一つの肉となる。これは重大な秘義である。私はしかしキリストと教会について語っている」(エフェ 5, 31~32)。

もし使徒の手紙によって多くの人々を欺くマニ教徒が目を開けてこれを読んでいたら、旧約聖書をどのように受けとめるべきかを理解し、あれほどの中傷的な言葉によって自分たちが知らないことをあえて批判しなかったであろう。他方アダムと女が裸であったが動揺しなかったということは、魂の単純さと貞操さを意味している。というのは使徒はまた次のように言っている。「私はあなた方をひとりの男に、ひとりの貞潔な処女をキリスト

に捧げた。しかし蛇がエバをその賢さによって欺き、あなた方の精神がキリストのうちに
ある単純さと貞潔さから崩されないように恐れる」(2 コリ 2, 2～3)。

(1) virago は女戦士、virgo は処女を意味する。いずれも一般的な女という意味はない。

第 14 章 蛇は悪魔であり、エバは情愛を意味する

20. 他方蛇は確かに単純でなかった悪魔を意味している。というのはすべての獣の中で
もっとも賢いというのが比喩的に狡猾さを示している。しかし蛇は樂園のうちにではなく
神が造った獣のうちにいたと言われている。というのは上で述べたように、樂園とは至福
の生を意味しておりそこにはすでに悪魔であった以上蛇はもはやいなかったものであり、真
理のうちに立っていなかった以上至福から落ちていたのからである。しかし女は樂園にい
たが蛇はいなかったのにどのようにして蛇が女に語る事ができたかということについて
は驚くに値しない。実際彼女は場所的に樂園にいたのではなく、至福の状態に即してそこ
にいたからである。あるいはたとえ樂園と呼ばれるそのような場所があり、そこに物理的
にアダムと女が住んでいたとしても、我々は悪魔の接近を物理的に理解すべきだろうか。
もちろんその必要はない。むしろ霊的に捉えたらよい。使徒は「不従順な者たちのうちに
今も働く霊に従い」(エフェ 2, 2) と言った。それ故可視的に彼らに現われたり、ある
いはいわば物理的に働きかけて人々に近づいたのか。

もちろんそうではなく、驚くような仕方で彼が思考を通してできることは何であれ唆し
たのである。真理をもって語る人はそれらの唆しに抵抗する。そのことについても使徒は
言っている。「そのやり口は心得ているからです」(2 コリ 2, 11)。しかしもし彼が樂園
を守るならば彼を追放する。というのも神は人をそこで働かせ守らせるために樂園におい
たのだから。というのは教会について『雅歌』では「閉じられた庭、印をつけられた泉」
(4, 12) と言われており、確かに歪曲した誘惑者はそこには入れない。しかし女を通し
て彼は欺いた。我々の理性が罪への同意へと導かれたのは、いわば支配者の男である理性
に従うべき魂の部分に喜びが生じたからに他ならない。

21. 今でも罪へと落ちるときには我々のうちの各人のうちに、あのときのあの三者、す
なわち蛇、女、男のうちに起こったことが生ずるのである。何故ならまず見たり触れたり
聞いたり味わったり嗅いだりすることによって思考か身体感覚を通して唆しが生ずる。
その唆しが生じたとき、もし我々の欲望が罪を犯すことに動かされないならば蛇の狡猾
さは排除される。しかしもしそれが動かされると、ちょうど女が誘われたようになる。し

かし時として理性は男性的に、生じてきた欲望を抑制し押さえる。このことが起こると我々は罪に落ちず、かなりの格闘によって冠をかぶせられる。

しかし理性が同意して、欲求が動かしたことが遂行されるべきであると判断すると、人はいわば楽園から追放されるようにすべての至福の生から追放される。というのは行為はたとえ遂行されていなくても、良心は同意ということにおいて有罪となるので罪が彼に帰せられるからである。

第 15 章 どのように誘惑が彼らを投げやったか

22. しかしどのように蛇が罪へと説得したかは入念に考察しなければならない。というのはそれは我々の救いと大いに関わるから。何故なら我々が今それらのことを用心するためにこれらのことは書かれているから。事実蛇に問われて女が蛇に神に命じられていたことを答えたとき、蛇は「あなたは死んだりしない。神はあなたがそれから食べた日に、あなたの目が開かれ、神々のように善悪を知るようになることをご存じなのである」と言った。この言葉によって、罪が傲慢を通して説き伏せられることを見る。「あなたは神々のようになる」と言われていることが関係している。また「あなたがそれから食べた日にあなたの目が開かれる」と言われたことも神の下にあることを望まず神なしに自らの力のうちにあることを望むようにと説得され、また神の内的な光の必要はなく自らの予知、つまり自らの目だけを用いて善悪を識別するときその彼らが支配しないようにと嫉妬する神の掟などは守らないようにと説得されたとする以外にどう理解したらよいのだろうか。このことを神は禁止したのであるがそれが説得されたことである。つまり過度に自らの力を愛し神と等しくなろうとして、それによって神に服従し身体を服従させていた——ちょうど楽園の中央に立てられた木の実のように——中庸を悪く用いそして神の掟に抗したのである。そして彼らが受け取っていないものを捕まえようと望んだとき、受けているものを失ったのである。何故なら人の本性は神が支配者でないならば、自らの力で至福になることは受けていないからである。誰も支配することなく自らの力で至福であられるのはただ神のみなのである。

23. 聖書は語る。「女が見るとその木は食べるによく、目が見て知るのによかった。」もし彼女の目が閉じていたならばどのように見ていたのであろうか。しかしこれは我々がその実から取った後にその目が開かれたと解するべきである。その目によって彼らは自分たちが裸であることを見、自分が嫌になり、すなわち狡猾の目によって単純さに嫌気がさし

たのである。というのも人は真理のあの深い秘義の光から落ちると、人を騙す見せかけ以外に傲慢が気に入るものはないからである。ここから彼らが望んでいる人を騙したり、欺いたりすることができる人が大いに賢いと思ひ込むような偽善が生ずるのである。というのは女が男に与え彼らは食べ、そして彼らの目は開けたからである。それについてはすでに述べられた。それから彼らは自分たちが裸であることを見て、歪曲した目には裸とい名で意味される単純性が恥ずべきと思われたのである。従って彼らはもはや単純ではないように、彼らはイチジクの葉から自分のためにエプロンを作り、それで彼らの恥じるべきもの、つまり隠れている単純性を覆ったのである。狡猾な傲慢さはそれを恥じるからである。イチジクの葉とはもしこれが非物体的なもののうちで正しく言われるならば、精神が不思議な仕方です嘘をつく欲求や喜びから蒙るところのある種のかゆみを意味する。従ってジョークを愛する人はラテン語では *salsus* と呼ばれる⁽¹⁾。確かにジョークではふりは主要な地位を占めている。

(1) 元々は「塩辛い」「辛辣な」といった意味である

第16章 隠れ、散歩、訊問の意味するところ

24. 従って神が夕方頃楽園を歩いていたとき、つまり彼らのところに裁きにやってきたとき、神はまだ彼らの罰の前に楽園を歩いている、すなわち神の臨在が彼らの上を動いているが、すでに彼らは彼の命令のうちに立っていなかった。そして夕方頃というのは相応しく、すなわち太陽がすでに彼らには沈んでいて、つまり真理の内的な光が彼らからとられていた。彼らは神の声を聞いてその視界から隠れた。神の視界から自らを隠すものは、神を捨て自らのものをすでに愛しはじめているものに他ならない。というのは今彼らは嘘という服を着ており、嘘を言う者は自分のことから語っているから。こういうわけで、彼らは楽園の中央にある木の近く、つまり神の下で身体の上に、事物の中位に秩序づけられている自分の近くに隠れたと言われる。こうして彼らは自分の方に隠れ、彼らが自分たちはそうでなかった真理の光を離れた後、惨めな誤りによって混乱した。というのは人の魂は真理に参与することができるから。しかし真理とは魂の上にある不可変的な神ご自身である。それ故その真理から人が背き自分自身に向き、支配者であり照明者である神からでなく、自らのいわば自由な動きから喜んでいると嘘によって暗くなる。というのは嘘を言う者は自分のことについて語るから。こうして彼は困惑し預言者の声を明示する。「私の魂は私の方に向かって困惑している」(詩41, 7)。従ってアダムが尋ねられたのは神が彼の居場所がわからなかったからではなく、罪の告白を強制してのことである。同様に主

なるイエス・キリストも彼が尋ねたかくも多くのことを知らないわけではなかった。アダムは神の声を聞いたとき、彼は裸だったので隠れたと答えた。神がアダムを造ったその裸が神にはまるで気にいらぬかのように、惨め極まりない誤りによって答えたのである。この誤りの特性は、自分に気にいらぬものは神にも気に入らぬと判断したことである。主が「誰がお前が裸であると告げたのだ。お前にそれだけはたべてはいけぬと私が言った木から食べたのだな」と語ったことを崇高に理解すべきである。というのは彼は偽りから裸だったが神の光を着ていたから。神から背き自らに向いたこと、これがあの木から食べたということである。彼は自分の裸を見て自分自身のものを彼は何も持っていなかったもので、それが気に入らぬのである。

第 17 章 罪の拒絶と蛇の罰

25. 続いて傲慢さの常として、女に同意したことで自分を攻めず自分の罪を女に押しつけた。そして惨めなものが生みだした狡猾さから出たかのように、彼は巧妙に彼の罪を神自身に押しつけようとした。「女が私に与えた」と言わずに加えて「あなたが私に与えてくれた女」と言っている。罪人にとって自分が咎められていることを神に帰そうとすること以上によく使う手はない。これは傲慢の血管から生ずる。

神がすべての主であるからすべての支配から自由であるように、人がその支配から自由であることを望むとき、つまり人が神と等しくあることを望むときに罪を犯す。人は威厳において神と等しくあることはできなかつたので、すでに転び自らの罪に横たわっている今、神が自分に等しくなることを努めている。あるいはむしろ神が罪を犯し、自分は潔白であることを示したがっている。女は尋ねられると罪を蛇に押しつけた。まるで彼は妻を彼女に従うために受けたのであり、自分に彼女を従わせようとはしなかつた。あるいは彼女は蛇の言葉を受け入れる程には神の命令は守れていなかったようである。

26. 蛇はもはや訊問されず最初に罰を受けた。というのは彼は罪を告白することもできないし弁解するものも全くないから。しかしここでは最後の審判にとっておかれる悪魔の断罪は言われていない。それについて主は語って言う。「悪魔とその使いに準備されている永遠の火に赴く」(マタ 25, 41)。しかし我々にとって用心すべきその罰が言われている。というのは彼の罰は自分が神の命令を軽んじる人を力のうちに持っていることであるから。その宣言が彼に対してなされている言葉によってそのことは説明されている。そして罰はより大きくなる。というのは彼は不幸な力を喜んでおり、落ちる前に彼が立った

ことのない崇高な真理を喜んでいたから。従って家畜でさえ彼の上におかれる。それは力においてではなくその本性の保護においてであるが。というのは家畜は自分が持ったことのない天的な至福を失っておらず、彼らが受け取った本性において生活しているからである。このことから神は彼に言う。「お前は胸と腹で這うものとなれ」と。我々はこれを蛇において確かに見る。そしてこの表現は可視的な動物から不可視的な我々の敵にまで広がっている。事実胸という言葉は傲慢を意味している。というのはそこでの魂の衝動は支配的であるから。他方腹という名で肉的な欲求が意味される。というのはこの部分は身体において柔らかいから。そしてこれらの手段で彼が自らの欺きたい人に這うとき、神は「お前は胸と腹で這うものとなれ」と言われたのである。

第18章 蛇とエバの敵意

27. そして聖書は語る。「そしてお前は生きている間ずっと土を食べよ」。すなわち裁きという最後の罰の前にこの力を行使している間ということである。というのはこれが彼が喜び自慢している彼の生命と思われるから。それ故「お前は土を食べよ」は二様に解釈される。地上的な欲望によってお前が欺いている人々、すなわち地という名で意味されている罪人があなたのものになるだろうということか、それともこれらの言葉によって三番目の誘惑、すなわち好奇心が例えられているのか。というのは地を食う者は深く暗いものに、しかも時間的な地上的なものに入り込むからである。

28. しかし敵意は蛇と男の間ではなく蛇と女との間におかれている。それは蛇が男を欺かず誘惑しなかったからか。しかし彼が欺いていることは明らかである。あるいは彼がアダムを欺かず女を欺いたからか。しかし将来に関して特に「私はあなたと女の間には敵意をおく」と言われているので、その欺きが女を通して彼にやってくるその彼の敵なのではないだろうか。しかしもし続いて彼がアダムを欺かなかったら、エバも続いて欺かなかった。それ故ひとりの人のうちに女の像、範型を示している。そのことについて上ですでに多くのことを語った。その動物的な部分を通して以外に、我々が悪魔に誘惑されることを明白に示すこと以外にどのように解したらよいだろうか。他方悪魔の子孫と女の子孫との間に敵意をおくことについて悪魔の子孫によって歪んだ唆しが意味されており、他方女の子孫によってその歪んだ唆しに抵抗するというよい業の実りが意味されている。従って蛇は女の踵を見て喜びが許されないように滑るときその踵をつかむ。また女はその頭を見て悪い誘いの始まりにおいて彼を排除する。

第 19 章 女に加えられた罰

29. 女の罰についてはもはや問題はない。女は明らかにこの不幸な生活において苦しみと溜息を重ねるから。そして子どもを苦しんで生むということは可視的な女のうちに見られるものであるが、しかしより隠れたことを考察すべきである。何故なら雌の家畜においても子どもは苦しんで生まれ、その場合それは罪の罰というよりは死性の境遇であるから。従って女においてこれは死すべき身体の境遇であるということも可能である。しかし不死性から身体の死性への変化は大いなる罰である。しかし習慣がよい方向に傾くまで最初は苦しみをもたない。肉的な意志から何ら節制が生じないということはこの文に含まれる大いなる秘義である。これが生ずると、子どもが生まれるように、よい習慣を通して意志はよい行為へと向かう。その習慣が生まれるように苦しんでそれは悪い習慣に抵抗する。実際その誕生後に「お前は男の方に向き彼がお前を支配するだろう」と言われている。多くの、あるいはほとんどすべての女は男がいなくなると生まれ、その誕生後に自らを彼らに向けないであろうか。他方傲慢な女がいて彼女たちは男を支配するが、彼女たちは誕生後彼らの夫が自分たちを支配するという悪徳を欠いているのだろうか。自分たちが母親になり、一般にもっと傲慢になり、いわば自分に与えられた威厳を信じている。それ故「苦しんでお前は子を生む」と言われた後、「お前は男の方に向き、彼がお前を支配するだろう」と加えられたことは次のことを言いたいのではないだろうか。つまり肉的な喜びによって保たれている魂の部分がある悪い習慣に打ち勝とうとして、困難と苦しみを受け、なおかつよい習慣を生んだのであると。今やより用心深く慎重にいわば男である理性に従属することで喜んで命ずるものに仕え、再びある破壊的な習慣に流されないように。それ故悪意と思われるものは、もし肉的な仕方で霊的なものを読まないならば命令である。何故なら律法は霊的なものであるから。

第 20 章 男の罰

30. 同様に男自身に言われる文についてはどう言うべきか。もしかしたら生活必需品を容易く調達でき、地上で働かない金持ちはその罰を免れるべきであろうか。すなわちこう言われる。「土はすべてのもののの中で呪われるものとなった。生きている間ずっと悲しみ呻きながら食べなくてはならない。土はそこに茨とあざみをはえさせ、野の食べものを食べる。お前は顔に汗してパンを食べる。土に帰る時まで。お前がそこからとられた土に。土にすぎないお前は土に帰るのである。」

しかし確かに誰もこの文を免れないことは明らかである。この世に生まれた者は真理を見いだすのに壊敗する身体から困難さを有している。ソロモンは実際言っている。「壊敗する身体は魂に重くのしかかり、地上的な住居が多くのことを考える感覚を圧迫している」(知9, 15)。それは人が地から有している労役であり悲しみである。茨と刺は困難な問題の痛み、あるいはこの生の備えについての考慮である。これらのものが一般に根こそぎされず神の畑から投げられないならば、主が福音書で語っているように、人において実を結ばないように言葉を窒息させる。そして今や真理について目や耳を通して忠告されることが必要であり、それらを通して魂に入ってくる表象に抵抗するのは難しい——真理への忠告もまたそれらを通して入ってくるが——それ故その困難の中でパンを食べるために額に汗しない者はいるだろうか。

我々が生きている間じゅう、すなわち過ぎ去りていく生命の間われわれは蒙るだろう。これは自分の畑を耕した者に言われる。彼は自分がとられた地に帰るまで。つまりその生命の終わりまでそれに耐えるために。事実その内的な畑を耕してパンを手にした者は苦勞してこの世の終わりまでこの労役に耐えることができる。他方この生の後には耐えることは必要でなくなる。しかし恐らく畑を耕さず茨によって打ち負かされることを許した者はこの生ですべての業において地にとって呪いとなり、この生の後には浄化の火か永遠の罰を持つだろう。従ってこの文を避けられる者はいないのである。しかしこの生においてのみそれが感じられるように行なうべきである。

第21章 違反後アダムがどうしてエバを生命と呼んだのか。皮の衣の意味

31. しかし罪と神の裁きの宣言後、アダムがその女に対してそれが生きるものの母でありそれが死に値するものとなった後、死すべきものを生むことを決めた故に生命と呼ぶことが誰を動揺させないだろうか。聖書は苦しんで彼女が生んだ子どもたちに注目しており、彼女に男への向き直りが生じ男が女を支配するのであるが、それらの子孫については上で述べられたとおりである。こうして彼女は生きるものの生命であり母なのである。実際罪のうちにある生命は聖書では死というのが普通であり、使徒は喜びのうちに生きるやめは死んでいると言っている。また死んだ体という名で、罪そのものが意味されているのを読む。すなわち「死人から洗い清められても、またそれに触れた者はその入浴においてどんな益があるのか。同じように罪を断って断食しても、またその上を歩いたら同じことにならないか」(シラ 34, 30~31)。

実際聖書は罪の代わりに死人をおいた。他方罪からの節制と断食、それはちょうど洗い

清め、つまり死人からの清めである。同様に、罪に帰ること、それがいわば再び死人に触れることである。それ故いわば男に従うように、理性に従わなければならない我々の動物的な部分が、生命の言葉から正しく生きることの胎児をはらんだときどうして生命と呼ばれないだろうか。そして節制が生まれることで、苦しみ呻きながら悪い習慣に抵抗し、よい習慣を正しく行なうように生んだのに、生きるものの母、つまり死人という名でそのことが意味されうることを我々が教えたところの罪に対抗すべく正しく行なうことの母とどうして呼ばれないことがあるのか。

32. 事実アダムから生まれた我々すべてが本性に負いはじめ、神がその木の実が食べられないように命令を与えて脅したあの死。それ故その死は皮の衣にたとえられる。実際彼らは自分のためにイチジクの葉からエプロンを作った。そして神は彼らに皮の衣を作った。すなわち彼らの真理の顔から背いて嘘をつく欲求を求めた。そして神は彼らの体を死すべき肉へと変えた。そこには嘘をつく心が隠れている。

何故ならこの身体の中に隠れているように、あの天的な身体において思考は隠れることができると思ふべきではないから。いくつかの魂の動きが、顔、特に目において現われるように、天的な身体の透明さと単純さのうちにすべての魂の動きは全く隠れないと思うから。従ってこの生において皮の衣の下で嘘を隠すことができても、それを憎み真理への燃えるような愛で用心し、聞く者が耐えられないようなことを隠し嘘を言わないならば、彼らは天使の形に住み移るであろう。事実何も覆われないような時が来る。というのは隠れているもので公にされないものは何もないから。今や罰する神の宣言の下で、それが皮の衣の所まで、つまりこの生の死まで来ているけれども、しかしその間樂園にいたのである。普通死んだ家畜からはがされる衣以上のどのような表現によって、我々は身体で感覚する死を意味することができたであろうか。従って神の命令に反して、法に適った模倣によってではなく不法な傲慢によって神になろうと人が欲するとき、彼は獣の死性へと投げられるのである。従って神の法が神の口によって彼をあざける。そのあざけりによって我々が傲慢を用心できるかぎり忠告されるのである。

第 22 章 アダムの追放のアレゴリカルな解釈

33. 「見よ、アダムは善悪を識別する知識について我々のひとりのようになった。」この曖昧な表現は比喩を必要とする。何故なら「彼が我々のうちのひとりのようになった」という言葉は二重に理解することができるから。「我々のうちのひとり」とは、ちょうど神

ご自身のようにと解される。ちょうど元老院議員のひとりというのが確かに元老院議員として言われるように。これはあざけりに属する。

あるいは本性によってではなく創造主の恩恵によってではあっても、もしその權威の下に留まろうとするならばそれ自身が神となる。今執政官ではなくても執政官のうちの、あるいはそれに代わってと言われるように、我々のうちと言われるのである。しかし彼が我々のうちのひとりとなるのは何に関してであるか。すなわち善悪を識別する知恵に関してである。神が知恵を通して知っていることを悪を感じたとき経験を通して学んだのである。そして至福で調和しているときは蒙ることを望まなかった全能者の權威を自らの罰によって避けることができないことを学ぶのである。

34. 今やアダムが命の木に手をのばしてそこから取って食べて永遠に生きないように、神は彼を樂園から解雇された。「追放した」ではなく「解雇した」と言われているのは、自分自身の罪の重さで、いわば自分に相応しいところに駆り立てられたことをよく示している。悪人が善人の間で生活をはじめ、もし自分をよい方に変えようとしないとそのことを蒙る。善人のその集まりから、自分の悪い習慣の重さによって追い立てられる。彼らは意志に反して彼を除外することはしないが、彼の望みに従って解雇されるのである。

「しかしアダムが命の木に手をのばさないように」と言われていることはまた曖昧な表現である。何故なら「だから私はあなたに二度とあなたがしたことをしないように忠告する」と言うとき、確かに彼がしないことを望んでそのように言う。同じように「だからあなたがよくなることを警告する」と言うとき、確かにあなたがよくなることを望んでいる、つまり私はあなたに善人になることが可能であることの望みを捨てていてわけではない。使徒が「神が彼らに真理を知るように悔い改めを与えないように」(2テモ2, 25)と言うときもそのように語っている。従って人はあるとき手を命の木にのばして永遠に生きるように、この生の労役のうちに解雇されたと見ることができる。

手をのばすことはそれを通して永遠の命が回復される十字架が意味されている。たとえばそのように「彼が手をのばして永遠に生きないように」という箇所を理解したとしても、死んだ人が神の慈しみによって時の定めに従って再び生き、罪の後いなくなったものが見いだされるときまで知恵への入り口が閉じていたことは不義な罰ではない。それ故甘美の樂園から彼は解雇され、自らがそこからとられた地で働き、すなわちその身体において働き、そこでもしできるならば帰るに値するものを集める。しかし彼は惨めな状態で樂園の反対におり、確かにそれは至福の生の反対にいる。何故なら樂園という名で至福の生が意味されていると思うから。

第 23 章 ケルビムと回る剣が意味するもの

35. 「神はケルビムと回る炎の剣をおき——このことは回転するという言葉によって言われることができるが——命の木の道を守らせた。」ヘブライ語の聖書を解釈した人が言うように、ケルビムはラテン語で知識の完全性と言われる。他方回る炎の剣は時間的な罰と理解される。というのは時間は回転によって回るから。すべての苦悩はある仕方で燃すので炎とも言われる。しかし消耗のために燃すことと浄化のために燃すことは違う。事実使徒も言う。「誰かがつまずくなら、私が心を燃さないでいられるでしょうか」（2 コリ 11, 29）。しかし愛から生じた故にこの情熱は彼を清めたのである。そして義人が蒙るそれらの苦悩はこの炎の剣に属している。というのは金も銀も火において試される。そして人は謙遜の暖炉の中で受け入れられる（シラ 2, 5）。同様に「陶工の器がかまどの火で吟味されるように、苦悩の試練が義人を試す」（シラ 27, 6）。それ故使徒が言うように、「神は愛する者を鍛え、子として受け入れる者をみな鞭打たれる」（ヘブ 12, 6）し、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を生むことを知っている」ので、我々は知識の完全性と炎の剣が命の木を守ることを読んで聞いて信ずるべきである。それ故困難の忍耐と知識の完全性という二つのことを通してでなければ、命の木に到達することは誰もできない。

36. しかし困難の忍耐はこの生においては命の木に向かうほとんどすべての人にとって耐えるべきこととしてある。しかし知識の完全性は、わずかの人しか到達しないように思われる。すべての人が困難の忍耐、つまり炎の回る剣を経験しても、知識の完全性を通して命の木に到達する人はそのすべてではない。

しかしもし我々が使徒の「律法の完成は愛である」（ロマ 13, 10）という言葉に注意し、これと同じ愛がああ双子の命令、つまり「あなたは主なる神を心と魂と精神をつくして愛しなさい。そしてあなたと同じように隣人を愛しなさい。これら二つの命令のうちにすべての律法と預言がかかっている」（マタ 22, 37～40）ということのうちに含まれていることを見るならば、疑いなく我々は回る炎の剣、すなわち時間的な困難の忍耐を通してだけでなく、知識の完成、つまり愛を通して命の木に来ることを理解するであろう。というのは「もし愛がなければ無に等しい」から（1 コリ 13, 2）。

第 24 章 アダムはキリスト、エバは教会

37. しかしこの説教で私が約束した出来事の考察については説明したと思う。続いて預

言の考察が説明すべきものとして残っているので今短くしよう。というのも他の残りの部分が方向づけられる、いわばある目印がはっきりとおかれたので、思うにこの考察が長いこと我々を留まらせることはない。使徒はその秘義は偉大であると語っている。すなわち「こうして人は父と母のもとを後にして、妻と結ばれ、二人は一つの肉となる」と言い、加えて「私はしかしキリストと教会について語っている」と言う(エフェ5, 31~32)。それ故歴史的にアダムにおいてみたされたことが預言においてキリストを意味している。彼は父のところから出てこの世に来た(ヨハ16, 25)と言うとき父のもとを離れた。彼は場所的に離れたわけではない。神は場所に含まれないからである。また罪の背きによって背教者が神のもとを離れるようにでもない。それは言葉が肉体となり我々のうちに宿った(ヨハ1, 14)ように、人において人々に現われたのである。それは神の本性の変化ではなく、より劣ったペルソナ、人間本性を受けたことを意味している。「彼は自らを虚しくされた」(フィリ2, 7)と言われたこともこのことと関係する。というのは父のもとにあった威厳のうちに現われたのではなく、それによって言葉がはじめに父のもとに見られたきれいな心をまだ持っていない彼らの弱さを考慮に入れたからである。それ故我々が「父のもとを彼が離れた」というのは、父のもとにあった者が人々に現われるために離れたということ以外に何を意味するであろうか。同様に母のもとを後にする、すなわちそれはシナゴグという古い肉の守りのことであり、それは彼にとって肉に従えばダビデの家系より出た母であり、二人は一つとなるためにその妻、教会にくっついた。というのも使徒は「彼は教会の頭であり、教会は彼の体」(コロ1, 18)と言う。それ故彼もまた教会が彼の妻として形成されるために、受難の眠りによって眠りにつかされた。彼はこの眠りについて預言者を通して歌う。「私は眠りにつき眠った。私は起きた。主が私を起こしたから」(詩3, 6)。それ故彼の妻として教会はその脇、つまり受難と受洗の信仰から形成された。事実その脇腹が突き刺されたとき地と水が流れ出た(ヨハ19, 36)。しかし上で述べたように使徒は「彼は肉によればダビデの子孫から造られた」と言った。つまり地上で働く人はいなかったけれども土の泥からである。というのは処女において働きかける人はいなくてもキリストは生まれたのだから。

「しかし泉は地からわき出て、地のすべての面を潤した。」地の面、つまり地の威厳とは、まさしく主の母、処女マリアと受け取られる。泉と水の名によって福音書で意味される聖霊がそれを潤した。あたかも楽園に立てられたあの人があるような泥から生じて働き守るために、つまり父の意志において彼がそれをみだし守るためである。

第 25 章 とりわけ異端者とマニ教徒が蛇を通して意味される

38. というのは彼が受けた掟を我々は彼において受け取った。何故なら各々のクリスチャンは非常に相応しい仕方でキリストの人格を担っており、主ご自身が「私の兄弟であるこのもっとも小さい者の一人にしたのは私にしてくれたことなのである」(マタ 25, 40) と言っているとおりである。そして我々は命じられたように、霊的な喜びを意味する楽園のすべての木を享受することができればよかったのであるが。使徒が言うように、「これに對して霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」(ガラ 5, 22~23) であるから。また楽園の中央に植えられた善悪の知識の木に触れず、すでに述べたように、真ん中に位置する我々の本性について自慢しようとしなければよかったのだが。実際は欺かれて単純なカトリック信仰と異端者の虚偽の間にあるものを経験した。実際はこのようにして我々は善悪の識別に到達したのである。聖書は言う。「あなたがたの間で誰が適格者であるかがはっきりするまでに異端も必要です」(1 コリ 11, 19)。というのは預言に従って、蛇は異端者の毒、特にマニ教徒たちの、また旧約聖書に反対する誰のものであれ彼らの毒を意味している。彼らがその蛇のうちに避けられ、むしろ彼らの内にそれが避けられていることほどにはっきりと予告されているものはないと思う。誰もこんなに冗舌に、自慢気に善悪の知識を約束しない。そしていわば楽園の中央に植えられた木のうちに、ひとりの人のうちに彼らがその認識を示そうとしていることを自慢するのである。さらにまた彼らが「お前は神のようになる」ということ以上のことを誰が言えるだろうか。彼らの傲慢な虚栄を通して、その同じ自慢で他人に打ち勝とうとして、彼らは魂が本性的に神と等しいことを主張する。肉の目が開かれるのは誰にとってだろうか。内的な知識の光を捨てて身体の目に属するこの太陽を崇拜することを強制する人々にとってに他ならない。そして確かにすべての異端者は一般的に知識の約束によって欺き、そして単純に信じていると見做した人々を非難する。何故なら、彼らの説得の対象は全く肉的なものであり、彼らは内的な目が盲目にされるように肉の目の開眼と呼ぶものに人々を連れていくから。

第 26 章 蛇は異端者マニ教徒である

しかし彼らの体も彼らにとっては気に入らない。それは罪を犯すことでそれを受けることになった罰の死性の故ではなく、彼らは開かれた肉の目にとってその裸が気に入らないように、神が身体の製作者であることを拒否するのである。

39. 「あなたは死んだりしない。神はあなたが食べた日に、あなたの目が開かれることをご存じなのである」という蛇の言葉ほどにこの人たちを激しく指示し、示すものはない。彼らは蛇がキリストであると信じ、闇の国の神があたかも人に善悪の知識のことで妬んで命令を与えたと想像する。このような見解からキリストの代わりに蛇を崇拝したと言われている蛇派の何某かが生じたのだと私は思う。そして彼らは使徒が「エバが蛇の悪巧みで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されてしまうのではないかと心配しています」(2 コリ 11, 3) と言っていることに注目しない。それ故これらの人々は預言によってあらかじめ言われていたと思う。我々の肉的な欲望はこの蛇の言葉によって誘惑され、それを通してアダムが、つまりキリストではなくクリスチャンが欺かれるのである。もし彼が神の掟を守ろうとして信仰によって忍耐をもって生きて、真理を知るのに相応しかなかったら、つまりもし楽園で働き彼が受け取ったものを守っていたら、あの醜さに陥らなかったであろう。というのは彼があたかも自分の裸によって自分の体が気に入らなくなったとき、イチジクの葉のように嘘の肉的な覆いを集めてそれで自分にエプロンを作ったからである。彼らはキリストについて嘘をつき彼が嘘をついたと説教するときこのことをするのである。そして使徒が「真理から耳を背け、作り話の方にそれていく」(2 テモ 4, 4) というように、ちょうど彼らは自らを神の顔から隠しその真理から自らの嘘へと向いたのである。

40. そしてその蛇は確かに教会を誘惑する異端者の誤りであり、それに対して使徒は呪いをかけて語っている。「エバが蛇の悪巧みで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されるのではないかと心配しています」(2 コリ 11, 3)。それ故その誤りは胸と腹で這い土を食べる。というのは自分たちのものでないものを自分たちのものとして自慢したり、最高の神と人の魂の本性が一つの同じものであるとすぐに信ずる人でなければ欺かれないからである。また肉的な欲望の虜になっていて、彼らが気まぐれにすることは何であれ、自分たちではなく闇の種族の仕業だと聞いて喜ぶ人でなければ欺かない。また地上のものを知っており、霊的なものを地上的な目で求める人でなければ欺かない。しかし蛇と女との間、またその子孫と女の子孫の間には敵意をおく。もし女が苦しみをもって子どもたちを生み、それを男に向け、男が女を支配するのであれば。というのはそのとき彼らが主張するように、我々のある部分が製作者の神に属し、ある部分が闇の種族に属するのではないことを知ることができるからである。むしろ人の内には支配する力を持つ部分と支配される劣った部分とがあり、ともに神から造られたのである。それは使徒が言うとおりである。「男は神の姿と栄光を映す者ですから頭にかぶるべきではありません。しかし女は男の栄光を映す者です。というのは男が女から出てきたのではなく、女が男から出てき

たのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。だから女は天使たちのために、頭に力の印をかぶるべきです。いずれにせよ主においては男なしには女はなく、女なしには男はありません。それは女が男から出たように、男も女から生まれ、またすべてのものが神からでているからです」(1 コリ 11, 7~12)。

第 27 章 アダムの墮罪と罰の比喩的解釈

41. 今アダムをその畑で働かせ、地が彼に茨とあざみを生ぜしめたことを本性としてではなく罰として理解させよう。そしてこのことは何某の闇の種族ではなく神の裁きに帰そう。というのも義の統轄は各々に自分のものを帰することだから。彼にキリストであるその頭から受け取った天の食物を女に与えさせよ。女から禁じられた食べもの、すなわち大いなる知識の約束を伴った異端者の偽り、そしていわば秘めごとの開放を受け取るな。その誤りは欺くとより心地よくなることにある。確かに異端者の傲慢な好奇的な欲求は『箴言』において女の像の下に叫んで言われる。「浅はかな者は立ち寄るがよい。」そして意志の弱い者には言う。「盗んだ水は甘く、隠れて食べるパンはうまいものだ」(9, 16~17)。しかし嘘の欲求に導かれてある人がそのことを信じ、それによってキリストが嘘をついたと信ずるとき、神の裁きによってまた皮の衣を受けることが必要である。その名によって歴史において意味されている身体の死性(それについてはすでに述べられたが)ではなく、預言において肉感的な感覚から引き出された表象から意味されていると私には思われる。神の掟によってその表象は肉的に嘘をつく者を追いかけて庇護する。このようにして彼は楽園、すなわちカトリック信仰と真理から、楽園に対して住む者として、つまりその信仰に抗するものとして解雇されたのである。その人があるとき炎の剣、つまり時間的な困難を通して自らを神に向け自らの罪を知り、呻きながらそれらが存しないある疎遠の本性ではなく自らを咎めるならば、彼は赦しを得るだろう。

そして愛である知識の完成を通してすべてにまさって不可変の神を愛し、心を尽し、魂を尽し、精神を尽して愛し、自分と同様に隣人を愛することによって、命の木に到達し永遠に生きるであろう。

第 28 章 最後にマニ教徒の個々の悪にくみを撃退する

42. それ故彼らは旧約の書物において非難すべきどんなことがあるのか。彼らはその習

慣に従って尋ね、主が与えることを決めたように我々は答える。彼らはどうして神は罪を犯すことを知っていた人を造ったのかと言う。何故なら神は罪人からも多くのよいことができ彼をその義の統御に従って秩序づけ、その罪は神に何ら害を与えないからと答える。罪を犯さなかったら死はなかっただろう。他方罪を犯したので他の死すべきものはその罪から正されるのである。事実巨大な死の思考のように人を罪から連れ戻すものはない。もし人が望まなかったら罪を犯さないように人を造ればよかったと彼らは言う。事実そのように造られたのである。彼らは言う。悪魔は女に近づくことを許されるべきではなかった。むしろ女が悪魔を自分の方に許すべきでなかったのである。もし彼女が望まなかったら、許さないように造られたのである。彼らは言う。女が生まれるべきではなかった。つまり善が生まれるべきではなかったと。しかし彼女もまた確かに何らかの善であり、相当な善である。使徒は彼女が男の栄光と言っており、すべては神によって造られた。同様に彼らは言う。誰が悪魔を造ったのか。自分で造ったのである。というのは本性によってではなく、罪を犯すことで悪魔となったのだから。また彼らは言う。もし彼が罪を犯すことを知っていたら、神は彼を造るべきではなかった。しかしむしろその義と予知を通して多くのものを悪魔の悪意から正すならば、どうして造るべきでなかっただろうか。もしかしたらあなたがたは使徒パウロが言うのを聞いたことがないのか。「私は神を冒瀆してはならないことを学ばせるために、彼らをサタンに引き渡してしまいました」(1テモ1, 20)。そして自分についてパウロは語る。「私の身に一つのとげが与えました。それは思い上がらないように、私を痛めつけるためにサタンから送られた使いです」(2コリ12, 7)。彼らは言う。それ故悪魔は役に立つからよいものかと。むしろそれが悪魔である限り悪いのである。しかしその悪意から多くの正しいこととよいことを働かれる全能の神はよいお方である。というのは悪魔に帰せられるのは、悪魔からよいことをする神の予知ではなく、それによって悪いことをしようとする意志以外にはないからである。

第29章 教会の教えをマニ教徒の誤りと比較する

43. 最後に我々にはマニ教徒との宗教についての問題がある。宗教の問題とはこうである。敬虔さによって神について感じられるものとは何か。何故なら彼らは人類が罪の惨めさの中にあることは否定できないので、神の本性は惨めさのうちにあると言う。我々は否定して、神が無から造ったその本性が惨めさのうちにあり、強制されてではなく罪への意志によってそうなったと主張する。彼らは神の本性は神ご自身によって罪の悔恨を強いられたと言う。我々は否定して神が無から造ったその本性が罪を犯した後、罪の悔恨を強い

られたと言う。彼らは神の本性が神ご自身によって赦しを受けたというが、我々は否定して神が無から造ったその本性がその罪から神へと向き直るとき罪の赦しを受けると言う。

彼らは神の本性は必然的に可變的であると言うが、我々は否定し、神が無から造ったその本性が意志によって変化すると言う。彼らは他の罪が神の本性を傷つけると言うが、我々は否定し、罪が傷つけるのは自らの本性以外のものではないと言う。そして我々は神は大きな善、大きな義、大きな不壊敗であり、罪も犯さなければ、罪を犯そうとしないものを傷つけもしないし、罪を犯そうとするものによって傷つけられることもないと言う。

彼らは神がその本性の部分を拷問にかけられるべく与えられるように強いられた悪の本性があると言うが、我々は本性的な悪は存しないし、すべての本性は善であり、神ご自身は最高の本性であり、他のものは神から造られた本性であり、すべてのものは神がそれをはなはだよく造ったので、存在するかぎり善であると主張する。しかし区別の段階をもって秩序づけられ、あるものはあるものよりもよいという風になり、この世はあらゆる種類の善によって満たされ、あるものは完全であるものは不完全だが、全体としては完全であり、その作者であり創設者である神は正しい統御によって支配すること続ける。神はすべてのよいものを意志によって造り必然的に蒙っている悪は全くない。その意志はすべてのものを超えその意志に対して何かを感じることではない。このように我々は言う。それ故彼らと我々は別のことを言っているので、誰でも自分で選んで従うがよい。というのは私は神の面前でよい信仰の中で語り、私が考えたことを論争の欲求も真理への疑いもなく、またより入念な解釈への先入見もなく説明したからである。